

# 目次

序論.....	1
科学は信頼されているか.....	1
科学のグローバリゼーション.....	3
科学研究の公正さ.....	4
<b>1 米国研究公正局への訪問.....</b>	<b>7</b>
1.1 ロックビルへ.....	7
1.2 研究公正局での出会い.....	9
1.3 研究公正局の現在.....	13
<b>2 アメリカで告発された日本人の事例.....</b>	<b>19</b>
2.1 アイオワ大学でのある内科研究者の事例.....	19
2.2 日本人肝炎研究者の事例.....	26
2.3 ダナハーバー癌研究所での事例.....	29
<b>3 アメリカにおける科学者の不正行為.....</b>	<b>35</b>
3.1 ペインテッドマウス.....	35

3.2	ボルチモア・イマニシ=カリ事件	38
3.3	研究公正局の創設と課題	40
3.4	不正を示す用語をめぐる話題	43
3.5	研究公正局の不正行為調査	45
<b>4</b>	<b>不正行為へのアプローチ</b>	<b>51</b>
4.1	発表論文数からみた不正行為	51
4.2	不正行為の発生	53
4.3	オーサーシップをめぐる議論	56
4.4	重複発表をめぐる議論	58
4.5	科学の不正行為の定義	60
<b>5</b>	<b>日本での不正行為事例</b>	<b>65</b>
5.1	重複発表と不正行為	65
5.2	『日本眼科学会雑誌』の重複発表論争	67
5.3	『日本整形外科学会雑誌』の撤回事例	69
5.4	海外の国際誌への重複発表	70
5.5	海外研究でのトラブル	73
5.6	人文・社会科学領域の事例	75
<b>6</b>	<b>海外の主要事例と各国の対応</b>	<b>79</b>
6.1	フィッシャー事件	79
6.2	ピアース事件	86
6.3	ヘルマン・ブラッハ事件	88
6.4	北欧4か国の現状	94
6.5	ドイツの現状	98
6.6	イギリスの現状	100

6.7	臨床試験をめぐる不正行為	102
<b>7</b>	<b>レフェリーシステムと不正行為</b>	<b>105</b>
7.1	質のフィルター	105
7.2	レフェリーシステムへの批判	106
7.3	米国化学会の倫理ガイド	107
7.4	オープンシステムへ向けて	108
7.5	不正行為への編集者の対応	109
<b>8</b>	<b>オーサーシップと発表倫理</b>	<b>113</b>
8.1	オーサーシップ	113
8.2	オーサーシップの定義	118
<b>9</b>	<b>学術論文の撤回とデータベース</b>	<b>123</b>
9.1	汚染された文献の運命	123
	臨床応用されたブローニング例／肯定的に引用されつづけた ダーシー例／公表に後ろ向きな編集者と共著者	
9.2	データベース製作機関の対応	128
<b>10</b>	<b>科学発表倫理の情報センター</b>	<b>129</b>
10.1	ケネディ記念倫理研究所図書館	129
10.2	ウェルカム財団のスピンと図書館	133
<b>11</b>	<b>日本の対応と今後</b>	<b>137</b>
11.1	日本の取るべき対応	137
11.2	科学のアカウンタビリティと伝達チャンネル	140
11.3	流動性と倫理	142

11.4	インターネット環境下のデータベース	143
11.5	事実からの出発	144
11.6	エジンバラ会議とベセスダ会議	146
<b>12</b>	<b>本書への歩み — あとがきに代えて —</b>	<b>153</b>
	アール川の岸辺で／ヨーロッパの十字路—バーゼル／風の街シカ ゴ／アイオワ大学での事例／ロンドンのウェルカム財団で／『ORI ニュースレター』の衝撃／情報自由法と公共の情報／研究公正局／ メドラインと研究公正局の協力／パブメドで不正行為論文を追求／ フィラデルフェアで	
付録1	不正行為と発表倫理に関する記事分析	169
付録2	不正行為と発表倫理を探究する	175
参 考 文 献		179
欧 文 索 引		185
和 文 索 引		189